奥多摩の教育

第 229号
発　行
奥多摩町教育委員会

令和４年８月１日現在
児童数　145名
生徒数　56名
教職員数　45名

6年生 日光移動教室

7月25日～27日実施

今年度も、古里小学校と氷川小学校の６年生が、合同で日光移動教室を実施しました。夏季特有の不安定な天候が当初心配されましたが、大きな影響を受けずに３日間を過ごすことができたのは、日頃の行いの成果だと言えそうです。

湯の湖畔で両校揃って

１日目、学校を出発していろは坂を上り、華厳の滝を見学しました。壮大な景色を見て、日光に来たことを実感していました。宿に到着した後には、日光の伝統文化である日光彫を体験しました。普段の図工で扱う彫刻刀との違いに初めは苦労する様子が見られましたが、扱いに慣れてくると、次第に表現を楽しんでいました。

１日目の夜には、両校の親睦を深める目的で、屋外でレクリエーション大会を開催しました。事前に班ごとに用意した出し物やゲームを楽しむうちに、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

２日目は、戦場ヶ原のハイキングや、中禅寺湖での遊覧船クルージングを楽しみました。高原の気持ちの良い空気の中、みんなで歩く道中は、とても楽しいものでした。奥多摩とは違う自然に触れたことで、改めて奥多摩の環境の素晴らしさも実感することができました。半日かけて歩いた後に食べたお弁当やソフトクリームは、格別でした。

３日目、お世話になった宿に別れを告げ、日光東照宮を見学しました。教科書やガイドブックでは感じられない、歴史的建造物の重厚で厳（おごそ）かな雰囲気に、子どもたちは心を奪われたようです。現地のガイドの話にも、一生懸命耳を傾けていました。

３日間があっという間に過ぎていきました。中学進学に向けて、両校の交流も重ねることができ、充実した移動教室になりました。

報告　氷川小　大久保 有彩

5年生 伊豆移動教室

7月14日～16日実施

古里小学校13名、氷川小学校10名、計23名の５年生児童が伊豆移動教室に行ってきました。天候が心配されましたが、予定していたプログラムを全て実施することができて、大満足の３日間となりました。

１日目は、地引網体験にバーベキュー、水族館鑑賞でした。漁師さんたちの指導を受けながら、みんなで力を合わせて網を引きました。想像以上に魚が獲れたことに大興奮！その後、海の幸を浜辺でいただき、何とも楽しく贅沢な時間となりました。

2日目は美しい柿田川湧水を見学し、三島青果市場へ行きました。広い場内、高く積まれた農産物の箱、動き回る車やトラック。興味津々で見学をする子どもたちは、市場の方に積極的に質問をしながら学習していきました。

午後はスノーケリング体験に取り組みました。ウェットスーツにフィン、ゴーグルにスノーケル。これらを身に付けるだけでドキドキワクワクです。さぁ、いざ海へ！「魚がたくさん見られたよ～。」と、満面の笑みで海の中の様子を話してくれました。

宿では、おいしいお料理と気持ちの良い温泉を満喫し、疲れを癒しました。夜には焼き物絵付け体験をし、世界で一つだけの湯呑茶碗を完成させました。

いよいよ最終日、この日は寄木細工（よせぎざいく）作りを体験しました。色々な木目の組み合わせを考えながら、オリジナルコースターを作ることができました。その後、バスにて奥多摩へ。道中、小田原城を車窓から見学し、その迫力に思わず「わぁ！」と感嘆の声が上がる程でした。

思い出に残る、内容の濃い3日間が無事に終わりました。子どもたちはこの移動教室を通して、さまざまな場面で協力し合い助け合いながら活動することができました。この経験を今後の生活に生かしていってほしいです。

移動教室実施にあたり、子どもたちを支えていただいた保護者の皆様をはじめ、各施設・関係者の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

報告　古里小 藤田 誠司

✿教育相談室より✿

想像の友達

相談員　石上 和伸

いつの間にかその子はいました。例えば退屈なお説教にうんざりする時。ふと脇を見ると…。金髪で青い目。「そううまくはいかないよ」そして最後には「でもがんばれよ」。次第に「やってみたら」と促すようにもなりました。嬉しい時の「良かったね」もありました。けれど僕が自分で歩み出すに連れ、その影は薄くなり、うなずきやほほ笑みだけが増え、そしてある日消えていました。後年、青年の姿で寄り添ってくれた時期もありました。忠告と諭しの言葉は心強かったですが、彼もまたいつのまに消えていました。時々彼らに会いたいと思います。いったい誰だったのか、今はどこにいるのか。気がかりな事として心に残っていました。

ある調査から、このような「想像の友達」は、そう珍しい存在ではないことを知りました。それでも、彼らと過ごした時間の実感は色あせることはありませんでした。彼らとの時間があったから、思いを確かめ、人の目を感じ、正すべきことは正し、そしてつらくても頑張ることができたのです。彼らは幼く拙い（つたな）私の心を支え、外の声を聞く備えをしてくれました。

「想像の友達」は、誰にもいるわけではないそうです。もしも本当に心を打ち明けられる人がいれば、彼らは現れなかったでしょう。けれどそのような友がいなくても、心は自ら必要とするものを用意できるのです。そう思うと人間の力、そして自分への信頼が増す気がします。

日頃から子どもたちを見ていると良き伴走者になれれば…と思う時があります。けれど実際にそれは簡単ではありません。

だから、せめて子どもが自ら用意するそれぞれの心の力を信じたい。そのさまざまな形を認めながら支え励まし、育みたいと願っています。心の存在は、力にも闇にもなると言いますから。

(1) 教育目標達成に向けた２つの柱

①　地域を大切にする生徒を育てるために：「地域を支える人材」の育成
ＥＳＤ（持続可能な発展のための教育）を柱に、持続可能な社会の形成者としての能力・態度を育てます。

②　21 世紀をたくましく生きる生徒を育てるために：「社会の中で自分のよさを生かせる人材」の育成
キャリア教育を柱に、社会の中で役割を果たしながら自分らしく生きていく能力・態度を育てます。

(2)「ESD」及び「キャリア教育」を通して育む「3+1 の力」

本校の教育の基盤は、「全員支援教育」です。これは、全ての生徒に対して、必要なときに必要な支援を組織的に施していくものです。この基本理念の下、主体的・協働的な学びを通して次の力の習得を促します。

①「主体性の基盤となる自己管理能力」
②「協働を支える人間関係形成能力・豊かな心」
③「主体的・協働的な課題対応能力」

以上の力を基に、自らの将来を考えることを通して「社会と関わり、自己の可能性を発揮しながら、よりよく生きていく力」の習得を促します。

(3) 効果的な実践に向けた 3 つのツールの活用

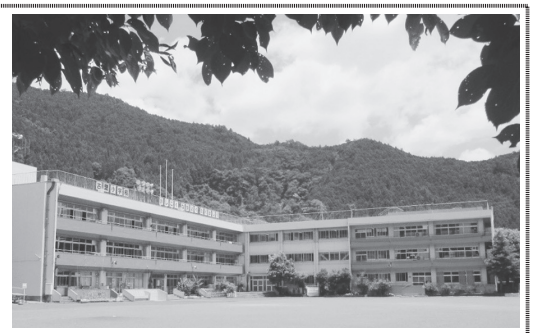
①「ICT 機器の活用」による効率的な学びの促進
②「マインドマップの手法」による思考力・判断力・表現力発揮の促進
③「プロジェクトアドベンチャーや構成的グループエンカウンター」を活用した主体的・協働的な学びの促進

古里小学校の特色のある教育活動

教育目標「命を大切にして　共に輝き　生きていこう」　かしこく・なかよく・たくましく

古里小学校は、子どもたちの元気と笑顔でいっぱいです。全校児童93名の子どもたち一人ひとりが、学習に運動に一生懸命に取り組んでいます。

「かしこく・なかよく・たくましく」を合言葉に、今年度も新型コロナ感染症防止対策を取りながら、子どもたちの健やかな成長のために、教職員一同手を取り合って教育活動をすすめています。



＜表現力向上の取組＞

古里小学校では、学期内に数回ずつ音楽朝会と音読朝会を実施しています。

音楽朝会では、のびのびとした声と明るい表情で、体全体を使って歌います。

音読朝会では、言葉の意味を考えながら抑揚を付けたり、声を合わせること意識したりしながら、詩をみんなで群読します。このような言語活動を通して、自信をもって表現できる子どもの育成を図ります。

＜読書活動の取組＞

図書室に入ると、季節に合った装飾や充実したおすすめの本コーナーなど、子どもたちが本に触れたくなるような仕掛けが満載です。

また、各学期に親子読書旬間を設定し、親子で読書を楽しんでいただいています。

今年度は保護者のボランティアの方々による読み聞かせを実施しています。子どもたちが皆、絵本に集中する姿が見られました。

＜体力向上の取組＞

学期に１回、「古里ンピック」と銘打って、体力強化旬間を設定し、多様な運動を全校で楽しみます。１学期は「玉投げ」「ふやし鬼」「綱引き」を行いました。今後は、運動会の練習やなわとび、持久走などに取り組んでいく予定です。

体を動かす機会を多く設け、子どもたちが主体的に運動を楽しむことを通して、体力の向上につなげていきます。

氷川小学校　特色ある教育活動

「鍛え　逞（たくま）しく！」

予測困難な時代を生き抜く逞しさを育てる

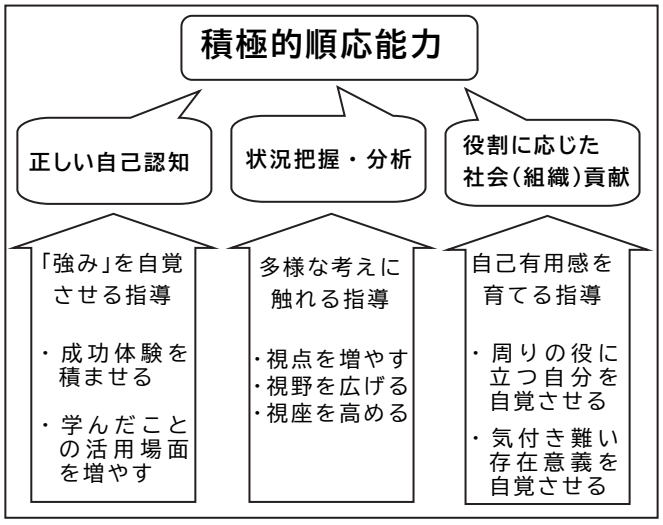
今の小学生が成人して社会で活躍する頃は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく、また急速に変化する予測困難な時代になっていると言われています。そんな時代を生きる児童に身に付けさせたい力を、氷川小学校では「**積極的順応能力**」と名付け、それを構成する「正しい自己認知」「状況の把握と分析」「役割に応じた社会（組織）貢献」の三つの要素を高める指導を「**鍛え　逞しく！**」の合言葉の下、日々実践しています。

「正しい自己認知」に向けて、「自らの強み」を自覚させる指導として、基礎・基本（読み・書き・計算など）の徹底と、基礎体力の向上に取り組んでいます。一学級一取組では、目標を設定しながら取り組ませることで、目標達成の度に成功体験を積み重ねています。

「状況の把握と分析」に向けて、多様な考え方に触れる指導として、意見交流や話合い活動を意図的に設定しています。視点を増やし、視野を広げる助言を加えながら、事象の捉え方の多様性を学ばせています。

「役割に応じた社会（組織）貢献」に向けて、自己有用感を育てる指導として、集団との関わりで児童の言動を価値付けています。たて割り班活動や委員会活動など、自分の役割に応じて貢献できたことを具体的に褒めることで、集団における自らの存在意義を自覚させています。

全校児童54人、一人ひとりの課題に応じた指導を工夫できるところは小規模校の「強み」でもあります。



根拠をもって伝え合うことのできる児童の育成

校内研究の取組として、思考力・判断力・表現力の向上にも力を入れて取り組んでいます。

毎時間の学習課題に対して、「何のために」と目的を明確に示し、発表や表現活動では「誰に向けて」という相手を意識させ、「どんな示し方で」と場面や方法についても考えさせながら取り組ませています。目的、相手、場や方法と照らして思考し、判断し、表現できるようになることを目指しています。

また、根拠をより説得力あるものとするために、教科ごとの見方・考え方を働かせて、考えの根拠を明らかにして伝え合う活動を意図的に設定しています。国語だけでなく、どの教科の学習でも鍛えられるように、計画的に指導しています。理科では実験や観察の結果をどう捉えるかを根拠に、社会ではデータや資料から読み取れることを根拠に、音楽では旋律や曲想の感じ方を根拠になど、教科ごとに根拠となることが違います。

教科に応じた見方・考え方を働かせながら、学習の目的に沿った取り組み方で、相手や場に適した方法を見付け、課題解決に臨ませながら、思考力・判断力・表現力を育てています。

体力向上一学級一取組
（学級全員での長縄跳び）

郷土奥多摩（文化財）

その25
奥多摩の縄文人と硬玉製垂玉

文化財保護審議会 副会長
梶谷 義明

町内には縄文人が生活したたくさんの痕跡があります。その遺跡の分布や、出土物の土器や石器が「奥多摩水と緑のふれあい館」に展示してあります。今回は、奥多摩の先住民の生活に思いを馳せてみたいと思います。

日本の縄文時代は、1万5千年前から3千年前頃まで続いたようですが、彼らは土器と弓矢を使用し、磨製石器を使い、集落を形成して定住化していきました。

海沢の下野原遺跡の発掘調査では、3千年から4千年前に100件近くの竪穴住居跡が、中央の墓地を囲むように、環状集落を形成している様子が見られます。お隣の青梅市の「かんぽの宿」の駒木野遺跡にも同時代の38軒の住居跡が発見されています。多摩川上流部の日当たりの良い平坦な土地は、シカやイノシシを狩り、クリやドングリを拾い、川魚を捕って生活するには適した場所であったと思われます。

縄文時代の狩猟生活には、用具（矢じり・刃物）に石器が使われていますが、奥多摩で産出された良質なチャートは、硬くて、薄く刃物状に割れる性質があり石器に最適です。重い石を多摩川を利用して運搬するにも、最適な場所であったと思われます。

小丹波の丹叟院下の滝の平で発見された硬玉製垂玉（ヒスイのネックレス）は異色の存在です。縄文後期から晩期のもののようです。国内唯一の産地である新潟県の糸魚川から全国に供給されたヒスイロードが想定されています。モノが流通するルートは、一方通行ではなく、双方向かつ多用途です。奥多摩にヒスイの来たルートはまたチャートが運ばれた道でもあります。

ヒスイは、その希少性からステータスシンボルとして、特別な地位の者が所有していたと思われ、集落の長の所有か、占い信仰の役割を果たす特殊な力をもったモノであったようです。

ヒスイは非常に硬い石です。石の硬さを示す尺度にモース硬度があります。モース硬度はひっかき傷の付き易さを表し、滑石が1で、ダイヤモンドが10、ヒスイやチャートは7です。この硬い石に当時どのようにして穴を開けたのか。縄文人は火をおこす道具として、「舞錐（まいぎり）技法」という、弓の弦を軸棒に巻き付けて上下に動かして軸を回転させる道具を使っていました。この道具で、細い軸棒の先に同程度の硬さのチャートの石の粉を付け根気よく回転させ、ヒスイに孔を開けていたと考えられます。

陳列棚にはヒスイと並んで滑石の管玉も陳列されています。こちらは先に説明した、最も柔らかい石で、ヒスイロードの途中の長野県大町地区が有名な産地です。

数千年前の奥多摩で、進んだ技術をもち集落を形成し、広範囲の流通を行いながら生活をしていた痕跡が「奥多摩水と緑のふれあい館」で体感することができます。